

整形外科で取得すべき考え方、手技、また手術方法はさまざまです。多くの若手と接していると、1)手術などの多くの手技を身に着けるための最短のコース、2)最も流行している手技が最良だと考えていることが多いような気がしております。多くの整形外科をリードしている医師たちは必ず回り道をしております。何回も失敗したり、基礎研究や留学などしたり、その中からかけがえのない財産を習得し臨床に生かしております。整形外科の手技に正解はありません。多くの多様性があり、昔、絶滅危惧種的な手術も、少し視点を変えるだけで、今は大流行りというのも多くあります(例：腰椎前方固定、高位脛骨骨切り術)。私の師匠、守屋秀繁名誉教授が仰るには、“大鳥な、流行ものに飛びつく医者ほど、くだらない。どんなにつまらなくみえても、10年継続した医師ほど評価される”、“なるほど”と思う次第です。

1本の木が倒れたらそれで終わりです。しかし何本の何種類の木々はどんな災害に遭遇しても必ず残る木があるはず。私のもう1人の師匠、高橋和久名誉教授はいつも、“若い人ほど優秀です。いかに上手に育てるかが大事ですよ。また教室として1つのテーマしかもたないほど面白いものはない。多様性が重要です”と。高橋先生の“若手の育成と多様性の認容”は私の現在の根底に流れているコンセプトであります。

高橋名誉教授が、メイヨークリニックに留学したとき、その当時の chair が“自分より若い人、また、医師以外の職種にこそ言葉遣いなど配慮しなさい”とよく言っていたなと、私によくお話していただきました。研修医の頃、守屋名誉教授宅にてバーベキューを御馳走になった翌朝、私を含む研修医15名は、守屋名誉教授にお礼を言いそびれました。“ばか者、医師以前に最も大事なことを、わかってない”と。あれから、25年以上経ちますが、私が研修医や学生に指導することは1つ、“どんな時でも礼を尽くしなさい”であります。そして最後にそういう多様性をもった医師であること、気遣いは必ず他人が評価してくれています。そうすれば“人生の扉は他人が開いてくれる”というのが私の3人目の師匠、福島県立医科大学の菊地臣一名誉教授の教えです。

* 千葉大学大学院医学研究院整形外科学〔〒260-8670 千葉県千葉市中央区玄阜 1-8-1〕Department of Orthopaedic Surgery, Graduate School of Medicine, Chiba University